

〔巻頭言〕

## 防疫体制の確立から清浄性の維持へ

齊 藤 政 宏

このたび、日本 SPF 豚研究会のお手伝いをさせて頂くことになりました(独)家畜改良センター茨城牧場の齊藤です。

私は、昭和 63 年に農林水産省畜産局に採用されてから、これまで農林水産行政、家畜改良センター業務、海外技術協力などを経て、昨年 4 月に現ポストに就き、豚の防疫業務に携わるようになりました。

茨城牧場に来てから SPF 豚の防疫について色々調べていますと、牛の牧場とは比べものにならない緻密なバイオセキュリティや、防疫に関する膨大なノウハウの蓄積に驚かされました。

防疫は、畜産経営を安定的に続けていく上で、絶対にクリアしなければならない課題となっています。

特に、伝染力が強く、経営に大きな悪影響を及ぼすような AD, PRRS, PCVAD などの伝染病が問題となっている養豚業界では、防疫管理が経営の生命線と言っても過言ではありません。

そのような養豚業界にあって、農場のバイオセキュリティを確立するためには何をどうすれば良いかについて、詳細かつ明確に示している SPF 基準は、実にすばらしいと思います。その技術的土台を担う日本 SPF 豚研究会会員の皆様に、敬意を表したいと思います。

茨城牧場は、AD や PRRS が全国に広く浸潤してくる中、種豚供給を担う立場から防疫体制の強化が求められていました。

そのような中、日本 SPF 豚協会等のご指導によりバイオセキュリティを確立し、平成 13 年から SPF に準じた防疫管理体制に移行することができました。

その後、不幸にして一時期に AD 禍に見舞われましたが、協会をはじめとする有識者の先生方のご指導により清浄化を達成しております。

このように、茨城牧場は、日本 SPF 豚協会のご指導により現在の防疫体制を確立して参りました。

そして、今の私にとって、この清浄な状態をどのように維持するかが最大の課題です。

実際、SPF 認定農場が伝染病の侵入を受けた事例もあると聞いています。

バイオセキュリティを確立すれば、それで終わるのではなく、清浄性を維持するために努力し続けることが求められます。

しかし、365 日 24 時間、防疫に緊張し続けることは非常に大変なことだと思います。ヒューマンエラーもあり、不可抗力もあるでしょう。

精神主義的にエラーをしないよう厳しく唱え続けても、それだけではリスクをコントロールでき

ないことは、現在では常識となっています。

私は、アプローチの1つとして、ケプナー・トリゴー法（KT法）のリスク・アナリシス（RA）を考えています。KT法RAは、現代社会のあらゆるリスクの管理に応用されている考え方です。

これは、問題が起こらないように発生予防対策（preventive measure）を講じ、それでも問題が起きた場合に備えて、発生した問題の影響を最低限に抑えるための発生時対策（contingent

measure）を準備しておくというものです。

私は、このKT法RAを養豚場の防疫リスク管理に応用できないか、日常業務の中で色々と模索しているところです。

日本SPF豚研究会におかれましては、SPF認定農場が安定的に半永久的に清浄性を維持できる方策、ヒントをご提案いただきたいと期待申し上げます。